

無痛分娩を希望される方へ



まつしま病院 産婦人科外来

・・・分娩の痛み・・・

陣痛は多くの女性にとって生涯で経験する最も強い痛みですが
しかし、痛みの感じ方には個人差があります
また、陣痛の痛みを感じる事が分娩に重要な意味があるという
根拠はありません

無痛分娩とは？

A：薬剤を用いる方法

- ①全身投与による方法 → 吸入麻酔・筋肉内注射・静脈内投与・肛門内投与
- ②局所麻酔による方法 → 硬膜外麻酔・傍頸管神経ブロック・会陰ブロック

B：薬剤を用いない方法

- ①心理学的的方法 → 精神予防法・睡眠療法
- ②生理学的方法 → 水中分娩・リフレクソロジー・アロマセラピー

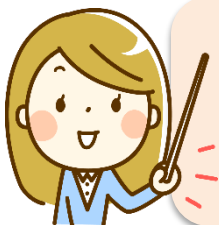
無痛分娩での出産について

●硬膜外無痛分娩のメリット

- *麻酔は下半身のみですので、ご本人の意識はハッキリしています
- *痛みのために血圧が上がったり、呼吸が乱れたりすることがありませんので
ストレスの軽減になります
- *産後の生活に早く戻れる体力の温存ができます
- *ご家族とゆっくりとした時間を過ごすことができます

●硬膜外無痛分娩が出来ない方

- *血が止まりにくくなる薬（不育症などで使用する抗凝固薬）を飲んでいる方
- *血小板の数が異常に少ない方
- *脳や脊髄神経の疾患がある方
- *脊椎（背骨）の手術をしたことがある方
- *背中のカテーテルを挿入する場所の皮膚に感染のある方
- *意思疎通が取れない方
- *胎児発育に問題のある方



当院の無痛分娩は産科医師が担当します
麻酔管理が困難であると思われる下記の方は、お受けしていません

- 初産で身長 150cm 未満
- BMI28 以上
- 側弯

～❀○❀○まつしま病院における無痛分娩は

硬膜外麻酔分娩 を行います❀○❀○～

無痛分娩を希望される方は、以下の流れになります

1. 無痛分娩に関する説明を受ける
2. 妊娠35週頃に、星野医師より麻酔の同意書について説明を受ける
3. 承諾書を確認後、子宮口の所見により計画分娩（誘発分娩）の日程が決まります

●無痛分娩の流れ

十分な分娩監視の必要性があるために、妊娠38週～40週での計画出産となります

- ① 入院後、必要に応じて子宮口を開大する処置をします
- ② 翌朝、胎児心拍モニター確認後に診察をし、陣痛促進剤の点滴を開始します
- ③ 硬膜外麻酔カテーテルを挿入します
- ④ ご本人の痛みの程度により、麻酔を開始します
麻酔の効果は薬剤投与後、約15分で現れます
ベッド上で胎児心拍モニターと血圧計を装着し、点滴を受けながら安静に過ごします
- ⑤ 子宮口が全開（10センチ）し、赤ちゃんの頭も降りてきたら分娩体位をとります
痛みはほとんどなく、挟まっている感じや圧迫感はありますがいきむことはできます
- ⑥ 出産後は、通常分娩の方と同様に分娩室で過ごします
- ⑦ カテーテルを抜去します
麻酔の効果は薬剤注入停止から2～3時間でなくなります
最初の歩行は産後4時間で開始します（必ず助産師が付き添います）
飲水をして吐き気などが無ければ、通常のお食事を開始します

●無痛分娩での注意

*カテーテル挿入後は、ベッド上でお過ごしいただきます

カテーテルがずれたり、抜けたり、別の場所に入り込んでしまうことを予防するためです

トイレに歩いて行く事も出来ませんので、定期的に管で採尿します

ベッドの上では、読書をされたり音楽を聞いたりしてお過ごしください

*お食事は控えていただきます

大きくなった子宮で胃や腸が圧迫されている状態に、さらに麻酔のお薬の作用が加わり吐き気をもよおすことがあるためです

点滴で水分・ミネラル・糖分の補給はされていますので、脱水などにはなりません

*分娩第2期が自然分娩と比較すると長くなる場合があります

*器械分娩

産道の狭さや赤ちゃんの向き、あるいは娩出力の不足などの理由で赤ちゃんが出てくるのをお手伝いすることがあります（これを器械分娩と言います）

吸引分娩と鉗子分娩の2つの方法があり麻酔分娩の時は、自然分娩と比較して約30%上昇するという報告があります

無痛分娩の問題点

●ご本人への影響

低血圧・発熱・かゆみ・吐き気が現れることがあります、ほとんど一過性のものです
また麻酔後の頭痛が認められる場合もあります
ごく稀（50,000～100,000例に1例程度）に、麻酔中毒や下肢神経障害などの重篤な合併症が起こることがあります
麻酔効果は個人差がありますので、圧迫感を痛いと感じる方もいます

●赤ちゃんへの影響

麻酔注入後に、一過性の徐脈になることがあります
麻酔薬は胎盤を通してわずかに赤ちゃんに移行しますが、多くの新生児を調べた結果その影響はないとされています
お産後の母乳への麻酔薬の移行についての研究報告はありませんが、血行動態からは悪影響を与えることは、ほぼ無いとされています

